

災害に強いまちづくり提案

2020年7月の熊本豪雨で被災した人吉市紺屋町など中心市街地の家造りを考えようと、NPO法人環境圏研究所の高木淳二さん(69)＝水上村＝が同市で、「捌水塾」を開いている。27、29日は熊本高専と信州大学の学生3人が卒業制作発表会を開いた。



水害リスクのある地域の家造りを考えた(左から)野田綾乃さん、上田結子さん、奥羽未来さん＝人吉市

熊本高専と信州大の学生

人吉市復旧「自由な発想で」

捌水塾は被災後の20年9月、水害時に浸水を防止するのではなく、浸水しても水の流れを良くして壊れない家造りを考えようと設立。高木さんが学生たちと被災地を歩いたり、住民から話を聞いたりして、水害リスクのある地域の家造り

を考えたと。発表会では、同高専3年の上田結子さんと野田綾乃

熊本豪雨

さんが、捌田酒造場の旧店舗兼自宅をモデルに、窓の代わりに竹を使用し、泥は防いで水は通す技法による再建を提案。災害時は建物の隣に作った櫓に避難し、半鐘を鳴らして危険を知らせる仕組みを発表した。西原村出身で信州大4年の奥羽未来さんは「今後も

水害リスクは残る」として、浸水地域の住宅は高台に移転し、愛着ある市街地には商業機能を残すことを提案。更地は植樹して自然を作り出すまちづくりを考えた。

学生らの説明を聞いた捌田酒造場の捌田将義さん(64)は「櫓に逃げられるのは良い考えだ」。豪雨で全壊した新温泉の永見明子さん(67)は「学生ならではの自由な発想が良かった。実際、市街地は更地が増え、どうするか考えないといけない」と話した。

3人を指導した技術士で一級建築士の高木さんは「人吉は水害の常襲地帯。堤防やダムに頼るだけでは限界があり、再び被災する。建物が壊れないためにどうすべきか、被災してもどう早急に復旧するかを考えてほしい」と指摘する。

(川野千尋)